



TITLE:

京都帝國大學經濟學會大會記事

AUTHOR(S):

CITATION:

京都帝國大學經濟學會大會記事. 經濟論叢 1922, 15(1): 148-150

ISSUE DATE:

1922-07-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/127916>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第

卷五十第

行發日一月七年一十正大

論叢

支那の古典に見はれたる社會政策

法學博士 田島 錦治

租稅負擔の一般と租稅の民衆化

法學博士 神戸 正雄

基督教文明の發展概論

法學博士 財部 靜治

社會哲學に於る主意的二元論的思想

法學士 恒 藤 恭

經濟道と經濟術

法學士 作田 莊一

時論

政費節減論

法學博士 小川 郷太郎

說苑

功利主義と生産政策

經濟學士 堀 經夫

雜錄

勞農露西亞の社會保險

經濟學士 岡崎 文規

英國と勞農露西亞

經濟學士 小川 福太郎

經濟學會公開講演會記事

河上、小川の諸教授を初め、多數の聽講者參集し、さしにも廣き教室も滿員となるの盛會であつた。

先づ小川部長登壇、開會の辭に次ぎ經濟學會の會計報告をなす。我が學會が斯學の上に名實共に如何に重大なる勢力を有し且つ其前途の洋洋たるかを思はしめ、今後會員一同が協力して研鑽琢磨し以て益々學會を發展せしむべきを説かれた。

次に恒藤助教授は「經濟政策の兩極限に就いて」と題し、二時間にわたる長講演をなす。その大要は次の如くである。

經濟政策は兩個の極限を有する。その一は無政府主義であり、その他は共產主義である。前者は、經濟政策の根本的な否定として、經濟政策の極小限を成すものであり、之に反して、後者は、經濟政策の極端なる肯定として、經濟政策の極大限を成すものである。現實の經濟政策は、これらの兩極限の間を連結する系列における無數の分岐點として

京都帝國大學經濟學會 大會記事

五月二十八日午後一時半より法學部第一教室
に於て經濟學會第四回公開講演會を開く。田島

成立するのであるが、近代の文明諸國に於ける經濟政策の發展の趨勢は、大體に於いて、兩極限の間の系列を、極小限より遠ざかりつつ、漸次に極大限に向はむとする根本的傾向を示すやうに考へられる。斯かる現實の傾向に卽して思惟するときは、この發展の系列は一つの直線として眼に映するけれど、若しもこの發展を觀念上終結せるものとして想定するときは、經濟政策の兩極限、即ち共產主義と無政府主義との兩者は、全然相合致せざるを得ない。しかしながらこの發展の系列の完結が經驗的にあたへられることは、到底あり能はず、批判哲學の意味に於ける理念としてのみ可能である。

三時半より小川教授の講演に入る。「經費節減論」の題下に現今の我國に於て經費節減の必要なる所以を論ず。これ亦二時間に上る大講演なりしが、其大體を要約すれば、次の如くである。

經費節減に當り第一に注目すべきは國民經

濟の方面である。世界大戰が我が國民經濟に及ぼしたる大影響の一は物價騰貴なる事實であるが、今にして思へば、物價騰貴の齎したる好景氣なるものは、果して堅實なる性質のものなりしや否やは疑無きを得ないのである。現に其結果は貿易關係の上に現はれ、輸入超過正貨流出なる悲しむべき產物を齎したのである。實に現今に於ける我が國民經濟の病弊は物價の暴騰に存してゐる。然るに我が國民は依然戰時好景氣の成金氣分に酔ひ、極めて不節制なる消費經濟を營み、以て物價の下落を不自然に妨害してゐる。故に願はくは、國民一般が經費節減の物價下落に必要な所以を自覺して、經費節減によりて物價を下落せしむる事に努力せられたいものである。これ國民經濟の方面に於て經費節減の必要なる所以である。

經費節減は更に財政方面に於ても講せねばならぬ。これ國家財政は國民經濟に於て最大の消費者として現はれるからである。而も、

今年度に入り、收入減少なる事實が財政の上に著しく現はれたるが故に、財政それ自身の必要よりしても、経費節減の方法を講ぜねばならなくなつた。旁々経費節減論が財政學上の時事問題として閑却すべからざる所以である。経費節減には種々の方法が存してゐる。その最も普通に行はれるのは所謂天引論であるが、此方法こそ経費節減方法としては最も不都合のものである。余は経費の内容に立ち入り、生かすべきものは生かし、減すべきものは減じ、以て経費節減の實を擧げたいのである。第一に経費の性質に基き節減の道を講じ、第二に行政整理により経費を節減し、第三に豫算の編成并に實行に關する手續を改善し以て其目的を達すべきである。

かくて國民各自が経費を節減し、又國家財政の上に経費節減の實があがる事によつて、茲に始めて我が國民經濟の病弊が除かれるのである。余は此事實が一日も速に實現せられん事を希望して止まないものである。

最後に田島教授の一場の挨拶ありて閉會、時に六時、更に席を學生集會所に移し同好會を開く、教授學生相興じ歡盡くる所を知らず八時散會。